

肉用牛の繁殖実態調査

緒方喜代子・後藤孝一・中嶋達彦・広松重広・*恒松正明 (熊本県畜産試験場・*現畜産課)

Kiyoko OGATA, Koichi GOTOH, Tatsuhiko NAKASHIMA, Shigehiro HIROMATSU and Masaki TSUNEMATSU :
Circumstances of Propagation of Beef Cattle in Kumamoto Prefecture

1. 目的

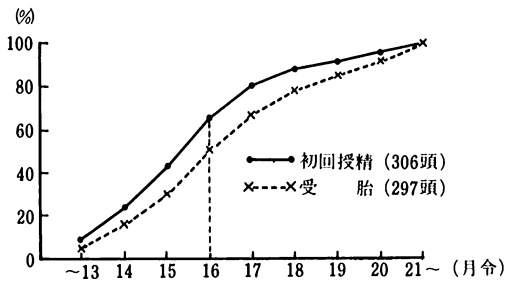
肉用牛の繁殖経営では、毎年いかにして子牛を生産するかということが経営上の最も重要な課題であり、そのためには受胎率を含めた繁殖成績の向上対策が必要である。そこで肉用牛繁殖農家の繁殖実態を把握して、問題点を摘出し、生産性向上の諸対策を講ずることを目的として本調査を実施した。

2. 調査方法

- 1) 調査期間 1982, 4.1~'83, 3. 31
- 2) 調査地区 県内6地区
- 3) 調査員数 各地区人工授精師2名, 計12名
- 4) 調査項目 受胎率(季節別, 飼養階層別, 年齢別, 地区別), 分娩後初授精および受胎までの日数, 初種付月齢, 種付回数, 分娩間隔

3. 調査成績

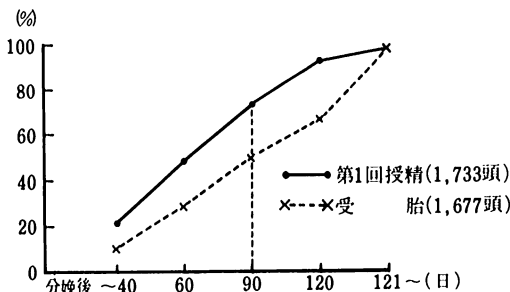
調査6地区の1,492戸に飼養されている肉用繁殖雌牛2,245頭について調査した。



第1図 未経産牛の繁殖実態 (累計)

1) 未経産牛の繁殖実態 (第1図) 未経産牛の改良目標の初産月齢26カ月以内を基準として、初回授精および受胎状況を見ると、生後16カ月以内に66.7%の牛に人工授精が実施され、そのとき受胎率は50.2%であった。初回授精月齢の平均は16.0カ月、受胎は16.8カ月に、改良目標と比較すると若干おくれる傾向がみられた。

2) 経産牛の繁殖実態 (第2図) 1年1産を目標と



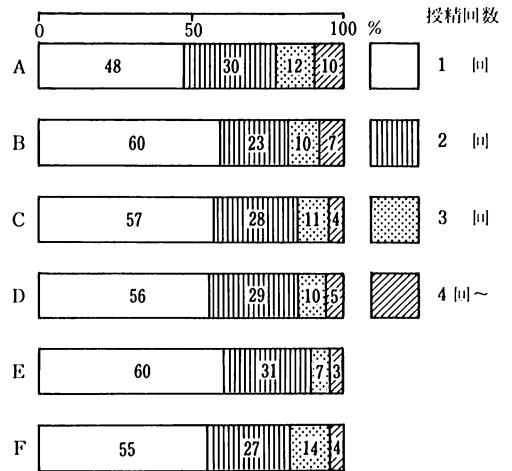
第2図 経産牛の繁殖実態 (累計)

しての、分娩後80~90日までの授精と、そのときの受胎についてみると、74%が授精を行い、51%が受胎していた。分娩後受胎までの平均日数は118日で、受胎に要する授精回数は1.6回であった。

3) 授精回数別受胎状況 全体的にみると、1回の授精で5.6%、2回までに84%、3回までで94%が受胎していた。ただしこれら成績は、地区により若干の差がみられ、また1回授精については、規模の小さい農家の受胎率が悪かった。年齢別にみると、未経産牛の受胎成績よくて、10才以上の高齢牛が最も悪かった。

4) 分娩間隔

57年度の分娩牛の前回との分娩間隔を、改良目標の13カ月以内と照合すると、61%が13カ月以内に分娩し、その平均は13.3カ月であった。また、地区別には(第3図)、かなりのバラツキがみられた。



第3図 地区別受胎状況

4. 考察

今回の調査結果から、地域、飼養階層、年齢により差がみられたことから、改善策としては次の諸点の必要が想定される。

- ①粗飼料の計画生産と給与計画
- ②産前、産後の栄養管理
- ③運動の励行
- ④発情の確認および適期授精
- ⑤疾病の早期発見、早期治療

また、今回は第一段階として、地域ごとの人工授精師各2名、計12名による調査であったため、地域が限定されたが、今後は調査対象地域を拡大しての、かつ濃な調査を行う計画である。